

愛着と気質が母子分離に及ぼす影響

—— 2, 3 歳児集団の継続的観察による検討 ——

尾 崎 康 子¹

週 1 回開催される親子教室に参加している101名の2, 3 歳児が母親から離れて仲間集団に参加する経過を1年間観察し、母子分離の状況を過分離型、徐々分離型、一定分離型、不分離型の4つのパターンに分類した。これらの各母子分離型における子どもの愛着安定性と気質の特徴を調べ、この時期の母子分離に関わる要因を検討した。母子分離の様相が相反する過分離型と不分離型に分類された子どもは、共に愛着安定性は低かったが、過分離型の子どもは新奇場面にしり込みしないのに対して、不分離型の子どもは新奇場面にしり込みし、順応性も低かった。このように、愛着の安定性が低い子どもでも、子どもの気質により母子分離の状況が異なることが示された。一方、新奇場面にしり込みをしても、愛着が安定していた徐々分離型の子どもは、次第に母子分離しており、2, 3 歳児が仲間集団に参加する際の母子分離は、愛着安定性と気質が相互に関係して特徴づけられることが示唆された。

キーワード：母子分離型、愛着安定性、子どもの気質、2, 3 歳児、縦断的研究

問 題

2 歳頃に仲間との遊びに興味関心を示すようになった子どもは、徐々に仲間と遊び始め、4 歳以降ようやく1つの遊びを仲間と共有して遊べるようになる(Parten, 1932)。この仲間遊びに至る経過は、家庭中心に生活していた子どもが、家庭外の仲間集団に参加していく経過でもある。そもそも人間は、生理的早産と言われるように未熟な状態で出生し、発達初期には、母親に精神的にも身体的にも依存した状態にあると言える。従って、2, 3 歳以降に仲間集団に加わるようになるには、子ども自身が心身ともに母親から離れるいわゆる母子分離の成立が重要であり、この時期の母子分離は子どもにとっても重要な発達課題である。しかし、少子化や核家族化が顕在化している現在、母子がより一層密着した状態に留まっている一方で、子どもの仲間との自然な出会いはますます限定されてきており、円滑な母子分離がなされて仲間集団に参加することは、育児課題として重要視されてきている。

従来の母子分離の研究では、精神分析学の立場から、Mahler & La Perriere (1965) によって、生後2, 3 年の間に、母親からの分離と分離不安を繰り返しつつ母子分離を達成し、個体化への過程を辿るという分離個体化説が提唱されている。そして、良好な母子相互作用があり、母親が子どもの分離不安に適切に関われば、分離個体化は順調に進むが、母親が分離不安に対

して適切な情緒的対応をせずに子どもの不安が潜在して思春期まで持ち越されると、それが思春期以後の精神的病理の重要な要因になると考えた。

一方、Bowlby(1969)は、発達初期に母親との間に形成される愛着関係が、子どもの健全な発達に最も重要な要素であるとする愛着理論を提唱している。愛着理論によると、子どもは誕生直後から母親との社会的相互交渉を通じて、母子間に情緒的な絆すなわち愛着を形成していく。この愛着形成をもとに、子どもは外の世界へと目を向けて広く相互交渉を展開するようになる。その際、母親は子どもの探索行動における安全基地として機能しており、子どもは母親と離れても安心して周囲を探索したり対象物と関わったりできるのである。そして、3 歳頃からは安全基地としての母親のイメージが内的ワーキングモデルとして内面化され、母親が不在でも安心して母親と離れていられるようになる。このように子どもは発達初期に母親との間に形成された愛着を基礎とすることにより、時間的にも距離的にも母子分離が始まる(田島, 1995)。

Bowlby (1969) の愛着理論と関連して、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) は、母親との分離・再会場面を設定したストレンジ・シチュエーション法を考案した。そして、母親への分離抵抗の強さや母親に慰めや保護を求める程度などの子どもの行動特性が愛着の形成状態を反映していると考え、それらの違いによって愛着安定と愛着不安定のパターンに分類した。この発達初期に安定した愛着パターンを示した子ども

¹ 日立家庭教育センター

は、その後の幼児期においても安定した愛着を示していることが報告されている (Main, Kaplan, & Cassidy, 1985 ; Wartner, Grossmann, Fremmer-Bombik, & Suess, 1994)。さらに、この愛着安定性は、思春期や青年期においても自律や自立に向かう心理的基礎として機能すると言われている (Allen, Hauser, Bell, & O'Connor, 1994 ; Ryan & Lynch, 1989)。

このように、子どもが自立に向かって順調な成長を遂げるためには、成長の過程でまず安定した愛着が形成され、それを前提として母子分離が達成されることが必要であると言えよう。特に、3歳以降に家庭外集団に参加する際の母子分離を達成することは、家庭外へと一歩踏み出し社会的自立へと向かう転機である。出生から社会的自立に至る順調な子どもの発達を継続的に検討していくためにも、この家庭外集団に参加する際の母子分離と愛着形成との関係を明らかにすることが必要である。この母子分離の実態について、尾崎・四日市 (1999) が1年間の推移を調べたところ、多様な母子分離の行動パターンが認められた。さらに、これらの母子分離の行動パターンが如何なる愛着形成と関係しているかを検討していくことが必要であろう。

一方、母子分離場面での子どもの行動を調べる際に考慮すべき要因として、子ども自身の持つ気質がある。子どもの気質を重視する研究者は、ストレンジ・シチュエーション法で評定される子どもの反応は、愛着の質というよりもむしろ分離ストレスに対する子どもの気質的特徴を反映したものであることを指摘している (Campos, Barrett, Lamb, Goldsmith, & Stenberg, 1983 ; Kagan, 1982 ; 三宅, 1989)。また、新奇な物や人に出会った時の「行動的抑制」は幼児期を通して一貫して見られること (Garcia-Coll, Kagan, & Reznick, 1984)、そして、幼児期において母子分離・再会場面で連続性が示されるのは気質的特徴であるとの指摘もある (中野, 1990)。確かに、乳幼児にとって強いストレスとなる母子分離場面においては、物怖じしない子はストレスも少ないが、引っ込み思案の子はストレスが大きいと母親から分離できなくなることが考えられる。従って、この母子分離場面での子どもの行動を検討する際には、子どもの気質的特徴を考慮する必要がある。

従来の研究では、母子分離・再会場面における子どもの行動を規定する要因が、愛着であるか気質であるかという二者択一の論議が行われてきた。しかし、母子分離と愛着の相補関係を考えると、母子分離に関わる要因として愛着を抜きにしては考えられないが、同時に、子どもの気質が母子分離の状況を左右している

ことも十分考慮できることから、愛着か気質かという二者択一ではなく、愛着と気質の相互の関係性を検討していくことが重要であると思われる。

そこで、本研究では、2, 3歳児の母子分離の実態を明らかにし、愛着と気質の如何なる関係性がそれらの母子分離を規定しているかを明らかにすることを目的とする。

方 法

対象者 週1回1年間開催される親子教室に在籍した母子101組を対象とした。入所時の平均年齢は、子どもが2歳11ヵ月 (2歳6ヵ月～3歳5ヵ月) であり、母親が32歳 (25歳～40歳) であった。子どもはいずれも家庭保育児で、男児49名 (48.5%)、女児52名 (51.5%) であり、子どもの出生順位は、第1子が81名 (80.2%)、第2子が15名 (14.9%)、第3子が5名 (5%) であった。家族の住居形態は一戸建て住宅33名 (32.7%)、高層住宅68名 (67.3%) であった。なお、いずれの母子とも1年間の親子教室 (28回) に75%以上出席していた。

親子教室の内容 親子教室は、母親の勉強会や話し合いが行われる母親教室と、自由遊び中心の保育が行われる幼児教室からなっている。母親教室棟と幼児教室棟は隣接しており、保育中も子どもは両教室棟間を自由に行き来でき、母親の側にいたい子どもは、最初から母親教室にいてもできる。なお、1クラスの人数は、母子40組である。

母子分離の評定 幼児教室での2時間の保育中の観察に基づいて、母親から完全に離れて幼児教室に参加した場合を3点、途中から誘導されて参加した場合や途中で母親の元に戻った場合を2点、終始母親の側にいた場合を1点として評定した。この評定は、慣らし保育が行われた入所後1ヵ月間と夏休みの1ヵ月間を除く10ヵ月間に計28回行った。

愛着の評定 Water & Deane (1985) が開発した愛着Qソート法は100項目であったが、現在では、1986年以降に改定された90項目の版が主に使用されている。さらに、近藤 (1998) は、これらの90項目から、愛着安定性と高い相関が報告された (Howes & Smith, 1995 ; 近藤, 1998) 42項目を選出し、愛着Qソート法 (42項目版) を作成した。90項目の愛着Qソート法の実施には約1時間以上もかかるため、101名について評価する本研究では、この愛着Qソート法 (42項目版) を使用した。

愛着Qソート法 (42項目版) の評定は、8名が分担して行った。子どもの母親に対する反応や行動特徴などを1ヵ月間観察するとともに、観察ではわからない項

目について母親に直接聴取し、それらを基に各自で愛着Qソート法(42項目版)を行った。観察時期に関しては、入所後6ヵ月目に行った。なお、事前に全評定者で特定の子どもの愛着Qソート法(42項目版)を行い、一致率が75%の基準に達してから観察を行った。

実際には、カードに書かれた項目内容に対して、子どもの行動特徴が「1:最も表さない」、「2:やや表さない」、「3:少し表さない」、「4:どちらでもない」、「5:少し表す」、「6:やや表す」、「7:最も表す」の7段階の何れであるかを判断し、最終的に全42枚のカードを7段階に6枚ずつ割り当てる。その割り当てた段階がその項目の配点となる。そして、愛着安定性の得点は、それらの行動を最も典型的に示した場合の標準分類(criterion sort)配点(Waters, Vaughn, Posada, & Kondo-Ikemura, 1995)と各被験者の項目配点の相関が求められ、それにFisher r-to-z変換を施して算出された。101名の愛着安定性得点の平均値は、.36(範囲-.91から.99)であった。

子どもの気質の調査 「子どもの行動の調査(BSQ)」(マクデビット・キャリィ, 1982)の100項目から、過活動性13項目、不規則性9項目、新奇場面の反応(しり込み)11項目、不順応性12項目、反応の強さ12項目、気分の質の悪さ12項目、非執着性10項目、過敏感性11項目の計90項目を選び使用した。全ての項目については、「1.ほとんど〜でない」から「6.ほとんどいつも〜である」までを、1点から6点で得点化し、各下位項目の得点を算出した(McDevitt & Carey, 1975; 佐藤, 1985)。それぞれの下位項目では得点が高いほど、過活動性項目については活動性が高い、不規則性項目については不規則である、新奇場面の反応項目についてはしり込みする、不順応性項目については慣れるのに時間がかかる、反応の強さ項目については反応が強い、気分の質の悪さ項目については機嫌が悪い、非執着性項目については長続きしない、過敏感性項目については過敏であることを意味している。この調査は、入所後4ヵ月目に、母親に記入を依頼した。

結 果

母子分離型の分類

子どもが母親から離れて幼児教室に参加する1年間の状況は、101名の1年間の延べ出席回数2434回の内、母親から完全に離れて幼児教室に参加した(母子分離評価は3点)のは1478回(60.7%)、途中から誘導されて参加した場合あるいは途中で母親の元に戻った(2点)のは831回(34.1%)、終始母親の側にいた(1点)のは125回

(5.1%)であり、多くの子どもが母親と離れて幼児教室に参加していた。また、1年間の全員の母子分離評価の平均値は2.56点(標準偏差は0.59)であった。

次に、各子どもの1年間の母子分離の経過を調べるために、1年(28回)の教室日を2ヵ月(4,5回)ごと5期に分け、各期における母子分離評価の平均値を求めた²。そして、1年間の母子分離評価の平均値2.56点を基準にして、各子どもの各期の平均値がそれ以上か未満かを判断し、その5期の推移から母子分離型を4パターンに分類した。5期全ての平均値が2.56点以上の子ども、即ち1年間を通して母子分離していた子どもを過分離型、最初は2.56点未満であったがその後に2.56点以上になった子ども、即ち最初は母子分離できなかったが次第に母子分離できるようになった子どもを徐々分離型、各期の平均値が2.56点以上になったり未満になったりと一定しない子ども、即ち母子分離ができたり、できなかったりと1年間一貫した傾向がなく様々な経過を辿った子どもを一定分離型³、5期全ての平均値が2.56点未満の子ども、即ち1年間を通して母子分離が困難であった子どもを不分離型とした。その結果、101名の子どもの母子分離型は、過分離型が29名(28.7%)、徐々分離型が26名(25.7%)、一定分離型が29名(28.7%)、不分離型が17名(16.8%)であった。

さらに、4つの母子分離型ごとに各期の母子分離評価の平均値を求め、それらの5期の推移を図示したのがFIGURE 1である。なお、これら4つの母子分離型における子どもの月齢の有意な違いは認められなかった($F(3,97)=0.81$)。

母子分離型における男女差

4つの母子分離型における性別人数をTABLE 1に示す。母子分離型と性別との関連を検討するために、母子分離型(4型)×性(男女)の χ^2 検定を行ったところ、有意な関係は認められなかった($\chi^2(3, N=101)=4.933$)。従って、母子分離型による男女の違いは示されなかった。

母子分離型における愛着安定性得点

愛着Qソート法(42項目版)の分析によって得られた愛着安定性得点を、それぞれ4つの母子分離型間で比較した。4つの母子分離型における愛着安定性得点の平均値と標準偏差をTABLE 2に示す。愛着安定性得点

² 尾崎・四日市(1999)が、1年間の母子分離の推移を詳細に検討した結果、1年を5期に分けることによって母子分離の年間変化が明瞭になった。

³ 一定分離型の子どもにおいては、母子分離の成否の年間推移が一人一人で異なっていたため、各期の平均値を算出すると1年間の5期の推移はほぼ一定となった。

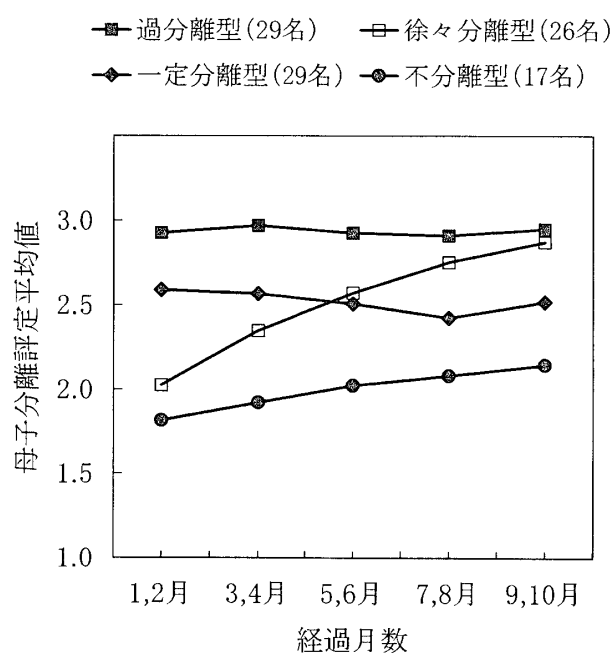


FIGURE 1 母子分離型の年間推移

TABLE 1 母子分離型における性別人数

母子分離型	男	女	計
①過分離型	10	19	29
②徐々分離型	16	10	26
③一定分離型	13	16	29
④不分離型	10	7	17
計	49	52	101

について、母子分離型間の 1 要因分散分析を行ったところ、型の効果が有意であった ($F(3,97)=4.10, p<.01$)。さらに、LSD 法による多重比較では、過分離型<徐々分離型、過分離型<一定分離型、不分離型<徐々分離型の有意な関係 ($p<.05$) が認められた。

母子分離型における子どもの気質

子どもの気質である過活動性、不規則性、新奇場面の反応(しり込み)、不順応性、反応の強さ、気分の質の悪さ、非執着性、過敏性の各下位項目の得点について 4 つの母子分離型間で比較した。4 つの母子分離型における気質項目の平均値と標準偏差を TABLE 3 に示す。8 つの下位項目について、それぞれ母子分離型

TABLE 2 母子分離型における愛着安定性得点

母子分離型	n	平均値	SD	F-test df=3,97
①過分離型	29	.18	.48	3.98, $p<.01$ ①<②, ①<③ ④<②
②徐々分離型	26	.53	.36	
③一定分離型	29	.48	.44	
④不分離型	17	.23	.47	

LSD 法により有意差 ($p<.05$) が生じた結果に不等号を示した。

間の 1 要因分散分析を行ったところ、新奇場面の反応(しり込み)と不順応性において型の効果が有意であったが ($F(3,97)=7.82, p<.001$; $F(3,97)=3.23, p<.05$)、その他の過活動性、不規則性、反応の強さ、気分の質の悪さ、非執着性、過敏性については有意でなかった ($F(3,97)=0.99, F(3,97)=0.84, F(3,97)=1.59, F(3,97)=1.29, F(3,97)=0.72, F(3,97)=0.97$)。

さらに、新奇場面の反応(しり込み)における型の効果について LSD 法による多重比較を行うと、過分離型<徐々分離型<不分離型そして一定分離型<不分離型について有意な関係が認められ ($p<.05$)、徐々分離型の子どもは過分離型の子どもより、また不分離型の子

TABLE 3 母子分離型における子どもの気質

母子分離型	n	平均値	SD	F - test df = 3, 97
過活動性				
①過分離型	29	3.72	.51	0.99
②徐々分離型	26	3.90	.52	
③一定分離型	29	3.94	.46	
④不分離型	17	3.86	.66	
不規則性				
①過分離型	29	3.25	.24	0.84
②徐々分離型	26	3.35	.28	
③一定分離型	29	3.10	.26	
④不分離型	17	3.10	.33	
新奇場面の反応(しり込み)				
①過分離型	29	2.95	.81	7.82, p<.001
②徐々分離型	26	3.39	.70	①<②<④
③一定分離型	29	3.12	.81	③<④
④不分離型	17	4.07	.83	
不順応性				
①過分離型	29	3.08	.51	3.23, p<.05
②徐々分離型	26	2.92	.59	②<④, ③<④
③一定分離型	29	2.93	.57	
④不分離型	17	3.41	.60	
反応の強さ				
①過分離型	29	4.50	.66	1.59
②徐々分離型	26	4.16	.62	
③一定分離型	29	4.41	.49	
④不分離型	17	4.38	.59	
気分の質の悪さ				
①過分離型	29	2.93	.24	1.29
②徐々分離型	26	2.86	.28	
③一定分離型	29	2.82	.26	
④不分離型	17	3.08	.33	
非執着性				
①過分離型	29	3.18	.57	0.72
②徐々分離型	26	3.30	.68	
③一定分離型	29	3.07	.55	
④不分離型	17	3.21	.42	
過敏感性				
①過分離型	29	3.84	.56	0.97
②徐々分離型	26	3.81	.57	
③一定分離型	29	4.01	.48	
④不分離型	17	3.79	.42	

LSD 法により有意差 ($p<.05$) が生じた結果に不等号を示した。

どもは他の何れの型の子どもより新奇場面にしり込みすることが示された。同様に、不順応性における型の効果について LSD 法による多重比較を行うと、徐々分離型<不分離型そして一定分離型<不分離型について有意な関係が認められ ($p<.05$)、不分離型の子どもは徐々分離型と一定分離型の子どもより慣れるのに時間がかかることが示された。

考 察

母子分離と愛着安定性

Mahler & La Perriere (1965) は、分離個体化説において、生後 2, 3 年の間に、自他の分化期 (5~10ヵ月)、母から離れる練習期 (9~15ヵ月)、分離不安が生じて母へ接近する再接近期 (15~30ヵ月) と進み、最後に対象恒常性が成立し母子分離できる達成期 (30ヵ月以降) となる母子分離の発達モデルを提唱した。このモデルに従えば、本研究の対象児の月齢は、いずれも 30ヵ月以上であり、母子分離を達成している月齢に相当する。しかし、仲間集団に参加する際の母子分離の状態を調べると、1 年間母子分離ができた過分離型の子どもは、全体の 28.7% に過ぎず、母子分離が 1 年間完全にできなかった子どもの方が多かった。自己中心的な心性を持つ 2, 3 歳児は、仲間集団の中で物の取り合いをしたり、自分の思い通りにならないストレスを感じることが多い。そのため、2, 3 歳児が、仲間集団という家庭に比べてストレスの強い環境に置かれると、分離不安が生じて母の元に戻る行動をとることを示すものと考えられる。

母子分離型と愛着の関連を調べたところ、母子分離の様相が全く相反する過分離型と不分離型で愛着安定性が低かった。従来の母子分離の研究では、円滑な母子分離ができる子どもは、安定した愛着が形成されていると言われている。それでは、本研究において過分離型の子どもの愛着安定性が低かったのは何故であろうか。それは、仲間集団への参加というストレスの強い環境に置かれても、1 年間ほとんど母親の元に戻らなかったところに過分離型の子どもの問題性があると思われる。母から離れることができる子どもでも、困難なことや怖いことに遭遇した時には母親はまだ安全基地として機能するであろう。しかし、過分離型の子どもにとって、母親が安全基地にならなかった可能性が考えられる。一方、不分離型の子どもも、母親が安全基地として機能していたというより、分離不安が大変強いために 1 年間常に母親が気になり、母親にしがみついていた状態であると捉えることができよう。

それに対して、愛着が安定していた徐々分離型と一定分離型の子どもは、ある程度母から離れることができていたものの 1 年間の何れかの時期に母親の元に戻っていた。2, 3 歳児が仲間集団に参加した場合、愛着が安定した子どもでも何か困難な状況に直面した時には、安全基地である母親の元に戻ることは自然な行動であると言えよう。

母子分離の成否に関わる要因

過分離型と不分離型の子どもは、ともに愛着安定性が低かったにもかかわらず、母子分離に関しては分離と不分離という全く相反する様相であった。それでは、このような愛着の不安定な子どもの母子分離の成否に関係する要因とは一体何であろうか。それは、過分離型と不分離型の子どもとは、新奇場面の反応と不順応性の気質に違いがあったことに関係していると考えられる。母子分離場面における分離ストレスは、子どもの新奇場面における反応と関係すると言われている (Belsky & Rovine, 1987)。そこで、新奇場面にしり込みしない過分離型の子どもは、仲間集団に初めて参加する時も分離ストレスがないため、最初から母子分離していたと考えられる。一方、新奇場面にしり込みし、かつ順応性の悪い不分離型の子どもは、新奇場面が分離ストレスとなり分離不安が高まる状態が持続し、1 年間母子分離が困難であったと考えられる。このように、子どもの気質的特徴が母親からの分離行動の違いとなってあらわれたと考えることができる。

一方、徐々分離型の子どもに新奇場面にしり込みする傾向が見られたが、一年間の経過において子どもは徐々に母親から離れることができた。子どもと安定した愛着関係を持つ母親は、子どもの接近や慰めを求める行動に適切な対応ができると言われているが (Bates, Maslin, & Frankel, 1985; Lyons-Ruth, 1989; Matas, Arend, & Sroufe, 1978)、愛着が安定していた徐々分離型の子どもは、母親から適切な対応を得ることによって次第に安心して母から離れることができたと考えられる。まさに、安定した愛着でも不安定な愛着でも、引っ込み思案の子どもは分離ストレスを受けるが (Lyons-Ruth, 1991)、母親から安定した愛着による情緒的支持を得ることによって子どもは最適な自立を可能にしていくと言えよう (Bretherton, 1987)。

Ainsworth et al. (1978) はストレンジ・シチュエーション法における子どもの行動特徴の違いを愛着の状態の違いと捉えた。それに対して、子どもの気質を重視する研究者は、それらは愛着の質よりもむしろ母子分離場面のストレスに対する子どもの気質的特徴の反

映であると指摘し (Campos et al., 1983 ; 三宅, 1989), また, 幼児期に母子分離できるかどうかは, 子どもの気質によると考えた (Garcia-Coll et al., 1984 ; Kagan, 1983 ; 中野, 1990)。しかし, 2, 3 歳児が仲間集団に参加する際の母子分離の状況は, 愛着安定性と子どもの気質が相互に関係して特徴づけられることが示唆された。

愛着パターンとの関係

Ainsworth et al. (1978) は, ストレンジ・シチュエーション法における母親への分離抵抗の強さや母親に慰めや保護を求める程度などの行動特性によって, 愛着が安定した安定型と不安定な回避型及び抵抗型の 3 つの愛着パターンに分類した。安定型の子どもが, 母親を安全基地として利用することで不安から解放されるのに対して, 回避型の子どもは, 母親の周りにいる時に怒りやストレスを感じて (Ainsworth et al., 1978), そのストレスを避けるための防御方略として母親から離れている (Main & Weston, 1982)。この回避型の特徴は, 愛着が不安定で母親から極端に離れている過分離型の子どもの特徴と類似している。一方, 抵抗型の子どもは, 母親にしがみつくと一方で母親に密着していることへの怒りの抵抗を示すが, これは愛着が不安定で母親に極端にしがみついている不分離型の子どもの特徴と類似している。さらに, 不分離型の母親が子どもに適切な対応がとれず, その結果子どもは一層強く分離不安を持ち, 母親にしがみついたという事例研究の報告 (河村・尾崎, 1999) は, 抵抗型の子どもが, 母親が応答的でないために (Ainsworth et al., 1978 ; Belsky, Rovine, & Taylor, 1984 ; Lyons-Ruth, Connell, Zoll, & Stahl, 1987), 母親からの反応を引き出そうとして一層母親にしがみつくと (Main & Hesse, 1990) ことと重なりあう。

ストレンジ・シチュエーション法と愛着 Q ソート法の愛着評定がある程度一致する (Vaughn & Waters, 1990) ことを考慮すると, このような 2, 3 歳児の仲間集団参加における母子分離型とストレンジ・シチュエーション法の愛着パターンが概ね対応することが示唆される。しかし, これらストレンジ・シチュエーション法の愛着パターンと母子分離型の実際の対応に関しては, 追跡研究によって確かめる必要があるであろう。

母子分離パターン分類の必要性

Mahler & La Perriere (1965) や Bowlby (1969) は, 安定した愛着形成の基に母子分離が進行していく発達モデルを考えた。しかし, 実際の子どもの母子分離の状況を調べたところ, 愛着の安定状態と母子分離の程度は, 単純な線形関係ではなく, 愛着の安定性と子どもの気質が相互に関係して様々な母子分離の状況を作

り出していると考えられる。従って, Ainsworth et al. (1978) は, 母親との分離・再会場面における子どもの行動特徴をパターンに分類して愛着の質を評価したが, 2, 3 歳児が仲間集団に参加する際の母子分離を評価する際にも, 母子分離をパターン分類することによって初めて母子分離を取り巻く要因と母子分離の特徴が明確になると言えよう。

分離個体化の失敗は, その後の発達とりわけ対人関係のあり方に深刻な影響を及ぼすが (Lyons-Ruth, 1991), 日常生活において正常で幸せな母子分離を体験すれば後年のストレスに満ちた分離の有害な影響から子どもを保護すると言われており (Rutter & Harsov, 1977), 幼児期に最適な母子分離ができることは大変重要な発達課題である。実際の育児において, 母親が母子分離のつまずきに対して適切に対応できるように援助していくことが, 後年に対人関係や社会性の問題を持ち越さないためにも大変重要であると考えられる。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment : A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Allen, J.P., Hauser, S.T., Bell, K.L., & O'Connor, T. G. 1994 Longitudinal assessment of autonomy and relatedness in adolescent-family interactions as predictors of adolescent ego development and self-esteem. *Child Development*, **65**, 179-194.
- Bates, J.E., Maslin, C.A., & Frankel, K.A. 1985 Attachment security, mother-child interaction and temperament as predictors of behavior-problem ratings at age three years. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50** (1-2, Serial No.209), 167-193.
- Belsky, J., & Rovine, M. 1987 Temperament and attachment security in the strange situation : An empirical rapprochement. *Child Development*, **58**, 787-795.
- Belsky, J., Rovine, M., & Taylor, D. 1984 The Pennsylvania Infant and Family Development Project : III. The origins of individual differences in infant-mother attachment : Maternal

- and infant contributions. *Child Development*, **55**, 718-728.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York : The Hogarth Press.
- Bretherton, I. 1987 New perspectives on attachment relations : Security, communication, and internal working models. In J.D. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development* (2nd ed.). New York : Wiley. Pp.1061-1100.
- Campos, J.J., Barrett, K.C., Lamb, M.E., Goldsmith, H.H., & Stenberg, C. 1983 Socioemotional development. In M.M.Haith, & J.J.Campos (Eds.), P.H.Mussen (Series Ed.), *Handbook of child psychology. Vol. 2. Infancy and developmental psychobiology*. New York : Wiley. Pp. 783-915.
- Garcia-Coll, C., Kagan, J., & Reznick, K.S. 1984 Behavioral inhibition in young children. *Child Development*, **55**, 1005-1019.
- Howes, C., & Smith, E.W. 1995 Children and their child care caregivers : Profiles of relationships. *Social Development*, **4**, 44-61.
- Kagan, J. 1982 *Psychological research on the human infant : An evaluative summary*. New York : W.T.Grant.
- Kagan, J. 1983 Inhibition to the unfamiliar. Unpublished manuscript.
- 河村由紀・尾崎康子 1999 親子教室における3歳児の母子分離に関する研究(2)—母子密着型の事例研究 家庭教育研究所紀要, **21**, 115-122.
- 近藤清美 1998 父子関係の行動観察による評価 家庭教育研究所紀要, **19**, 89-103.
- Lyons-Ruth, K. 1989 *From birth to five : Developmental pathways of the young child at social risk*. Address to the Bunting Institute Colloquium Series, Radcliffe College, Cambridge, MA.
- Lyons-Ruth, K. 1991 Rapprochement or approachment : Mahler's theory reconsidered from the vantage point of recent research in early attachment relationships. *Psychoanalytic Psychology*, **8**, 1-23.
- Lyons-Ruth, K., Connell, D.B., Zoll, D., & Stahl, J. 1987 Infants at social risk : Relations among infant maltreatment, maternal behavior, and infant attachment behavior. *Developmental Psychology*, **23**, 223-232.
- Mahler, M.S., & La Perriere, K. 1965 Mother-child interaction during separation-individuation. *Psychoanalytic Quarterly*, **34**, 483-498.
- Main, M., & Hesse, E. 1990 Parents' unresolved traumatic experiences are related to infant disorganized attachment status : Is frightened and/or frightening parental behavior the linking mechanism ? In M.T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years : Theory, research and intervention*. Chicago : University of Chicago Press. Pp.161-182.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood : A move to the level of representation. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50** (1-2, Serial No.209), 66-104.
- Main, M., & Weston, D.R. 1982 Avoidance of the attachment figure in infancy : Descriptions and interpretations. In C.M. Parkes, & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *The place of attachment in human behavior*. London : Tavistock. Pp.31-59.
- Matas, L., Arend, R.A., & Sroufe, L.A. 1978 Continuity of adaptation in the second year : The relationship between quality of attachment and later competence. *Child Development*, **49**, 547-556.
- マクデビット, S.C.・キャリィ, W.B. 佐藤俊昭・古田文倭男(訳) 1982 子どもの行動の調査(BSQ) 東北大学(McDevitt, S.C., & Carey, W.B. 1975 Behavioral Style Questionnaire (for 3-7 year old children). Unpublished manuscript.)
- 三宅和夫 1989 子どもの個性 : 生後2年間を中心に 東京大学出版会
- 中野 茂 1990 乳児期から就学前期にかけての社会・情緒的行動の連続性 三宅和夫(編) 母子関係と乳幼児の性格形成 東京大学出版会 Pp.167-188.
- 尾崎康子・四日市ゆみ子 1999 親子教室における3歳児の母子分離に関する研究(1)—母子分離型の分

- 類についての予備的検討 家庭教育研究所紀要, **21**, 109-114.
- Parten, M. 1932 Social participation among pre-school children. *Journal of Abnormal Psychology*, **27**, 243-269.
- Rutter, M., & Harsov, L. 1977 *Child psychiatry*. Oxford : Blackwell.
- Ryan, R.M., & Lynch, J.H. 1989 Emotional autonomy versus detachment : Revisiting the vicissitudes of adolescence and young adulthood. *Child Development*, **60**, 340-356.
- 佐藤俊昭 1985 子どもの気質の追跡—第2報・日本語版 ITQ-R とその使用経験 東北大学教養部紀要, **49**, 196-175.
- 田島信元 1995 家族と子別れ 根ヶ山光一(編) 子別れの心理学 福村出版 Pp.42-59.
- Vaughn, B.E., & Waters, E. 1990 Attachment behavior at home and in the laboratory : Q-sort observations and Strange Situation classifications of one-year-olds. *Child Development*, **61**, 1965-1973.
- Wartner, U. G., Grossmann, K., Fremmer-Bombik, E., & Suess, G. 1994 Attachment patterns at age six in south Germany : Predictability from infancy and implications for preschool behavior. *Child Development*, **65**, 1014-1027.
- Waters, E., & Deane, K.E. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships : Q methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50** (1-2, Serial No.209), 41-65.
- Waters, E., Vaughn, B.E., Posada, G., & Kondo-Ikemura, K. (Eds.) 1995 Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models : New growing points of attachment theory and research. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **60** (2-3, Serial No.244).

謝 辞

本論文の作成にあたり、愛着Qソート法(42項目版)について北海道医療大学心理科学部教授近藤清美先生に有益なご助言を頂きました。記して厚くお礼申し上げます。また、観察に協力して頂いた方々に心より感謝いたします。

(2001.9.18 受稿, '03.1.20 受理)

Attachment, Temperament, and Maternal Separation : Observations of Peer Play by Toddlers

YASUKO OZAKI (HITACHI FAMILY EDUCATION CENTER) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2003, 51, 96—104

The present research investigated how attachment and temperament affect children's reactions to maternal separation in early childhood. Observations of 101 children separated from their mothers were made when they were playing with their peers, during the first year after they entered a family education center. The children, ranging in age from 2 : 6 to 3 : 5 years at the start of observations, were classified into 4 groups according to their reactions to maternal separation : (a) easy separation group (N=29) : those who easily separated from their mothers from the beginning of the year ; (b) slow separation group (N=26) : those who, during the year, gradually became better at handling the separation ; (c) consistent separation group (N=29) : those who had consistent reactions to separation throughout the year ; and (d) difficult separation group (N=17) : those who had difficulty separating from their mothers even at the end of the year. The observations indicated that the children in the slow-separation and difficult-separation groups had more shy temperament in new situations than those in the easy-separation group, whereas the children in the slow-separation group showed better attachment security than those in the difficult-separation group. These results suggest that children's patterns of reaction to maternal separation in early childhood could be predicted from a combination of their attachment security and their temperament.

Key Words : pattern of reactions to maternal separation, attachment, temperament, longitudinal study, 2- and 3-year-old children